

原 純輔・浅川達人著, 『社会調査』 ; 盛山和夫著,  
『社会調査法入門』

井上, 寛  
九州工業大学工学部

<https://doi.org/10.15017/8046>

---

出版情報 : 人間科学共生社会学. 5, pp.147-148, 2006-02-10. 九州大学大学院人間環境学研究院  
バージョン : published  
権利関係 :



〔書 評〕

原 純輔・浅川達人著

『社会調査』

(放送大学教育振興会、2005年、A 5 版、246頁、2600円)

盛山和夫著

『社会調査法入門』

(有斐閣、2004年、A 5 版、324頁、2300円)

井 上 寛

指示されたテキストはすでに手元にあつて、書評子みずからがおおいに利用しているものであつたが、編集者より依頼をうけたときには率直なところとまどつた。教科書は書評の対象になるのか。その書評の方法はどうあるべきか、またその意義はあるかと。もちろん意義ありと判断した。その理由はこうである。改めて社会学教育と社会調査の状況を垣間見るとき、一つの危機が継続しているように見える。それは社会調査をめぐる誤解と未熟なエトスと技法の修得の遅れである。社会調査については繰り返し語られるべきである。そしてここで取り上げる二つのテキストが良質の語りを提供している。これは書評の結論でもある。

少し具体的に見てみよう。二つのテキストは次のもの。目次とあわせて記載する。

原 純輔・浅川達人著『社会調査』	盛山和夫著『社会調査法入門』
1. 現代社会と社会調査	I 部 社会調査の方法を考える
2. 社会調査の用途と歴史	第1章 何のための社会調査か
3. 調査内容の決定(1)調査テーマと調査事項	第2章 量的調査と質的調査のそれぞれの意義
4. 調査内容の決定(2)調査票の決定	第3章 調査と研究の進め方
5. 調査対象の決定(1)標本調査の方法	第4章 社会調査を企画する
6. 調査対象の決定(2)サンプリング分布と統計的推測	第5章 ワーディング
7. 調査の実施と処理(1)実査と調査員	第6章 調査票の構成のしかた
8. 調査の実施と処理(2)調査票の点検とデータ作成	第7章 サンプリング
9. 結果の集計と分析と集計(1)基本統計量	第8章 調査の実施とデータファイルの作成
10. 結果の集計と分析(2)因果分析の方法	II 部 データから何が分かるか
11. 聴取調査の方法	第9章 分布と統計量
12. 調査報告をまとめる	第10章 検定という考え方
13. さまざまな社会調査(1)時系列調査と国際比較調査	第11章 平均の検定と差の検定
14. さまざまな社会調査(2)社会調査の告発と解明	第12章 クロス表と相関係数
15. 調査者と被調査者	第13章 回帰分析を理解する
	第14章 質的な研究とはどういうものか
	第15章 確率の基礎

(1) 社会調査のスコープについていえば、二つのテキストとも量的調査と質的調査と呼ぶものの両方を意識している。もちろん両者とも量的調査に相当するものに多くの頁を割いているのであるが、二つの調査のそれぞれの特徴に言及し、対立の幻想を指摘している。さらにいえばそこには盛山の認識論的・存在論的な背後仮説が色濃く現れている。すなわち「社会的世界は意味の世界」であり「社会調査は意味世界の解釈」ということになる。一方、原・浅川はそこでは禁欲的だが、重要な指摘をしている。「社会調査は、現代社会を特徴づける人間活動の一つ」とあるということである。

(2) 原・浅川は社会調査の手順を、調査の企画（調査内容の決定、調査対象の決定）→調査の実施（実査、データの作成）→調査のまとめ（集計と分析、調査報告のまとめ）からなるとしている。盛山もほぼ同様であるが、原・浅川が調査の企画のなかに言及していることからの一部をとりだし、調査の企画のまえに研究の企画をおいている。問とありうべき答えの設定、論証戦略の設定、データと分析手法の計画、そしてデータ収集の方法の計画をおいている。いずれの場合も、重要なことは説明（問に答えること）、仮説、作業仮説の明確な区別とそれらを明確にする辛抱強い作業である。

(3) 調査票による標本調査では、仮説を検証し初期の問に適切な解答を与えるためには、サンプリングと調査票の作成が重要な作業であるが、原・浅川の4, 5, 6章と盛山の5, 6, 7章は具体的な指導を与えてくれる。お手軽なアンケート調査を日常化している研究者と学生は、まずはここまでの章を熟読玩味するべきである。

(4) データの分析にかんしては、原・浅川は社会統計学にかんして禁欲的であるが、その理由の一つは原純輔・海野道郎『社会調査演習（第2版）』（東京大学出版、2004）との棲み分けにあるかもしれない。とはいえ、第10章は、変数の関連をめぐって、擬似効果と交互作用について見事な解説を提供し、間接的に、一方で素朴な相関分析をたしなめ、他方でコンピュータに依存した粗野な多変量解析をいさめている。盛山の10~13章は検定、クロス表分析、相関係数、回帰分析の丁寧な解説を与えている。さらに深めたければ盛山和夫『統計学入門』（放送大学教育振興会、2004）を読めばよいということになるだろう。

二つのテキストとも計量的研究を目指す若い学生が最初につまずく、平均や分散といった基本統計量の解説を読むだけでも有意義である。さらに盛山が15章に確率の基礎を置いているのも有益である。

(5) 過去に出版され、今も多くの研究者・学生・実務家が紐解く社会調査に関連するテキストは少なくない。二つのテキストの巻末の参考文献と紹介を参照してほしい。一つだけここで言及するとすれば、安田三郎『社会調査の計画と解析』（東京大学出版会、1970）である。書評子が思うに、原・浅川も盛山も、このテキストを意識し、そこからの発展を目指している。われわれは社会調査にかんする良質のテキストが追加されたことを喜ぶと同時に、これが教育と実務のなかで広く利用され、氾濫する「人間活動の一つとしての社会調査」の質の改善と向上が実現することを強く願うものである。